



## アナグマ

- ◆ 学名 *Meles meles*
- ◆ 分類 ネコ目 イタチ科
- ◆ 大きさ 頭胴長50～70センチ 体重5～10キログラム

名前にクマとつきますが、クマの仲間ではなくてイタチの仲間です。おもに森林でくらし、前足の大きくて長い爪を使って地中に深く長いトンネルを掘り、巣穴として利用します。巣穴への出入り口は木の根元や岩などの下につくられていて、トンネルの中にはいくつかの部屋があり、家族単位で生活しています。クマと同じように冬ごもりをするので、冬場でも暖かな日には巣穴から外に出て活動することもあります。

夜行性のアナグマは目があまり良くないので、臭いをたよりに食べ物を探しています。雑食性なので長く突き出した鼻先を使っておもにミミズや昆虫、カエル、ヒミズなどのほか地面に落ちている果実などを食べます。彼らが食べ物を探しまわると、4～5センチの深さで泥が掘り返されたり、落ち葉などが掻き回され、フィールドサインとして残されます。またフンにも特徴があって、ソーセージのような形をしていて色は真っ黒です。これはミミズなどの土の中の動物を食べる際に、泥も大量に食べているからです。

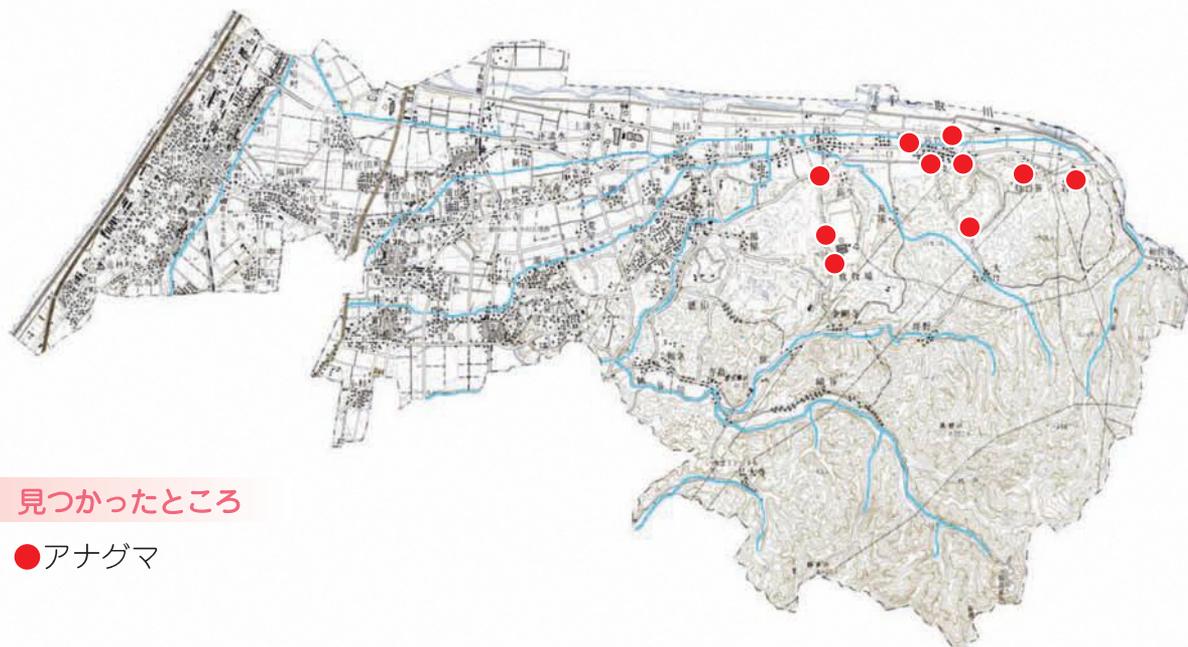
## — 同じ穴のむじな —

アナグマは穴を掘るクマに似た動物という意味から名付けられたようですが、ムジナを指すことが多く、地方によってはタヌキやハクビシンをさしたり、これらの種をはっきり区別することなく、まとめてさしている場合もあるようです。そのことから「一見違って見えるように見えても、実は同類である」と言うことをさして「同じ穴のむじな」あるいは「一つ穴のむじな」という言葉が生まれました。仲間同士という意味ですが、どちらかといえば、悪者同士という意味で用いられることが多いようです。また、ムジナがタヌキと同じ穴で生活する習性をもつことに由来しているという説もあります。

1924年に栃木県で、ムジナとタヌキを誤認して狩猟したことから、狩猟法違反の刑事裁判が行われ、それ以来「事実の錯誤」に関する事例を「ムジナ・タヌキ事件」としてよく引用されています。ちなみにアナグマ(ムジナ)はイタチ科で、タヌキはイヌ科に属しています。秋常山古墳にはキツネが掘ったと考えられる巣穴が多数見つかっています。



巣穴(秋常山古墳)



見つかったところ

●アナグマ



## アライグマ

- ◆ 学名 *Procyon lotor*
- ◆ 分類 ネコ目 アライグマ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約50センチ 体重5～10キログラム

北アメリカが原産地ですが、日本では1961年に愛知県の動物園から逃げ出したものが野生化したのが始まりで、その後も日本各地で飼育個体が逃げ出すなどしたものが、野外で繁殖を繰り返して個体数が増加していきました。

鳥や魚、カエル、トカゲ、果実などなんでも口にする雑食性です。また、クマなどと同じように地面にかかとをつけて歩くので、アライグマといわれていますが種別ではタヌキに似ています。5本の長い指と爪が足あとの特徴として残されています。

生態系に影響を与えるだけでなく、農産物を食い荒らしたり、人家に入り込んだりすることで人間の生活にも大きな被害がでるため、特定外来生物に指定されています。「石川県の哺乳類」(1999)には記載はありませんが、加賀市や小松市でも次第に被害が広がっています。能美市内におけるアライグマの情報は、2000年代の初めごろには記録されていて、調査期間中にもスイカなどへの食害が確認されました。

## — 洗い熊 —

前足の指が長く、するどい爪で器用に物をつかんで食べます。また前足が水にふれると、指で水中や水の底を探るといった本能的な習性があり、さらに、水辺でとらえた獲物を、一度水に漬けてから食べるので、あたかも物を洗っているように見えることから、「洗い熊」と名づけられたようです。

アニメに登場する「ラスカル」からは想像できませんが、畑作物など巧妙に採ることから、「おたずねモノ」になっています。スイカを食べる方法は独特で、前足が入るほどの丸い穴を開けて、中身を上手に掻き出して食べます。



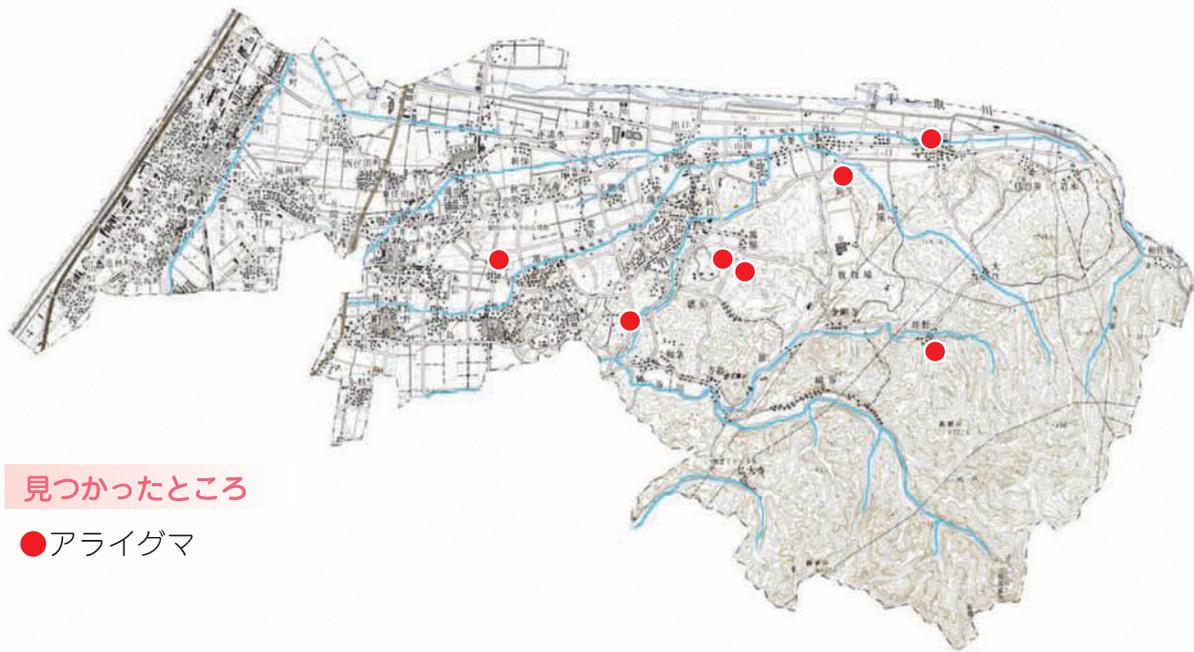
器用な食べ方



畑の作物が荒らされたことから許可をもらってワナをしかけた所、アライグマの成獣が捕獲されました。

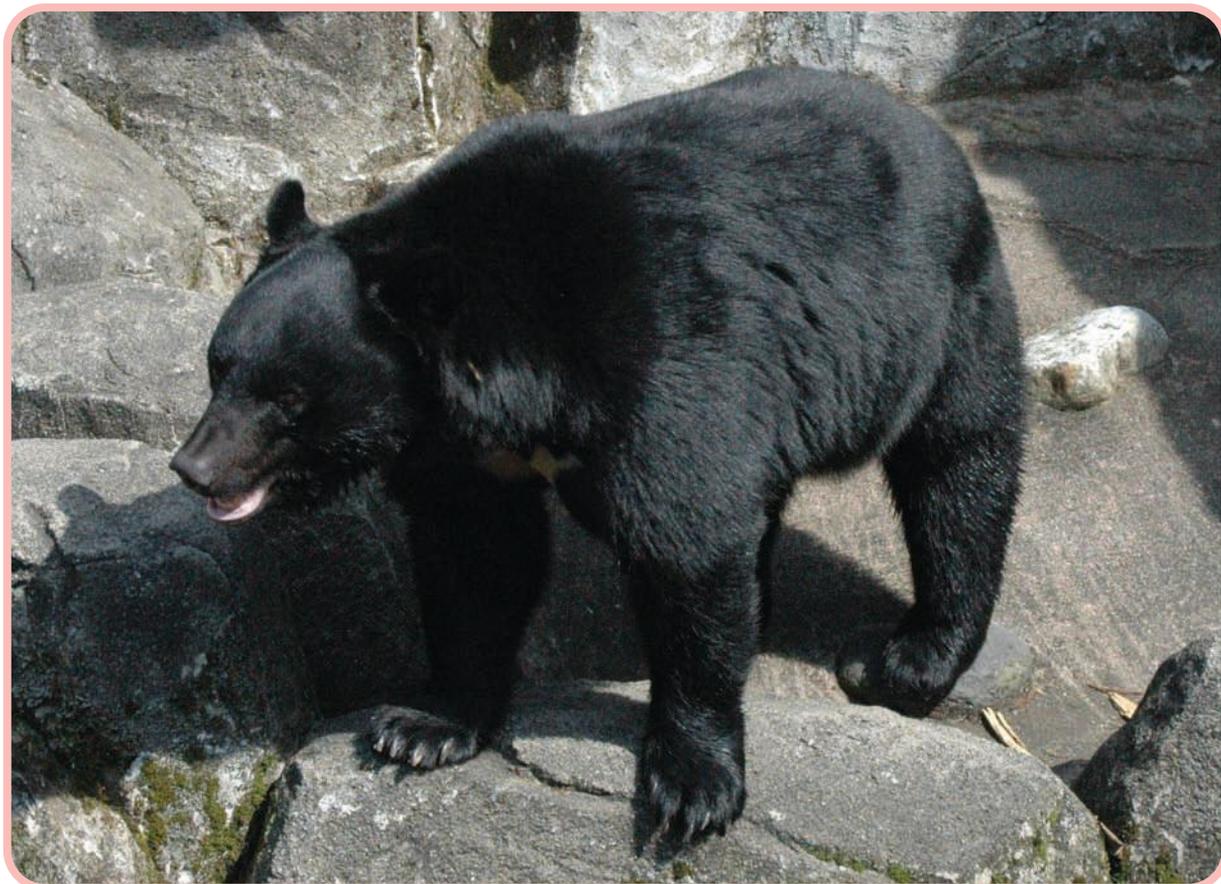


足あとは前足も後足も5指で、指先に爪あとが残るのが特徴です。



見つかったところ

●アライグマ



## ツキノワグマ

- ◆ 学名 *Ursus thibetanus*
- ◆ 分類 ネコ目 クマ科
- ◆ 大きさ 頭胴長 120～140センチ 体重 70～100キログラム

草や木の果実、花や根などのほか、アリやハチなども食べています。特に秋になるとブナやミズナラ、クリなどの堅果を大量に食べて体に脂肪をつけることで、冬ごもりに備えます。

冬ごもりは、クマやアナグマなどに見られる冬越しの方法で、あまり体温を下げずに冬を過ごす方法で、コウモリやヤマネなどが体温を下げて行う冬眠とは区別することができます。

また、「石川県の哺乳類」(1999)によると、積雪が50センチ以下では、雪を掘ってその下にある食べ物を食べていて、積雪量が増加して食べ物を探しにくくなるのが冬ごもりのきっかけのひとつとなるという説もあります。

ツキノワグマは大きな体に似合わず木によく登り、ミズナラやクリなどの実を枝ごと折りながら食べ、その枝を自分の尻の下に敷いてゆくことから、木の上にはクマ棚ができあがります。今回の調査では揚原山の周辺で、こうしたクマ棚を多数見つけることができました。

もし野外でクマに出会ったらどうしたらよいのでしょうか。クマは視力が悪く、おもに臭いをたよりに行動しているので、大声を出したり急に走り出すなど、クマに刺激を与えないようにすることが重要だといわれています。山歩きでは、音を出してこちらの場所を常に知らせることも大切なことです。

## — 熊手でかき集める —

熊手は竹や金属で作られた農具で、落ち葉やゴミを集めるときに使うことから、ほとんどの金品を一人占めにする時に「熊手でかき集める」といわれます。また幸運や金運を「かき集める」という意味を込めて、所によっては商売繁盛の縁起物として熊手を飾る事があります。

鋭い鉤づめをもつクマの手足は強く、木に登ったり、食べ物となる生き物を捕まえたり、敵を襲ったりする時に強力な武器となります。またこの手足で人が襲われることもあり、能美市でも1979年に岩本町で二人が襲われ、一人が死亡しています。



ハチの巣を荒らした痕



食べ物の種類でフンの形や色は変わりますが、特に秋にドングリを食べた後のフンは灰色をしています。

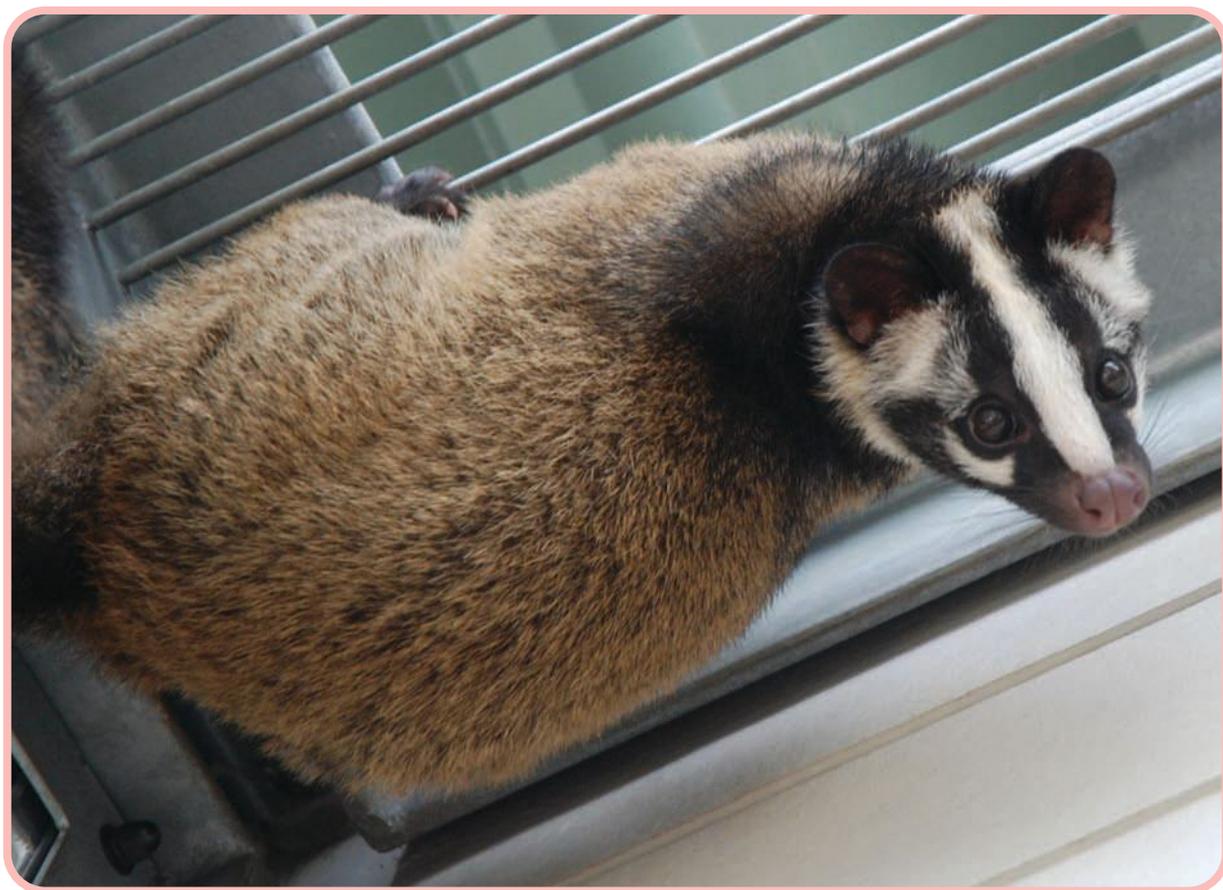


人間が裸足で歩いた時の足型に似ていて、前足は約10センチ、後足は約18センチくらいです。



見つかったところ

● ツキノワグマ



## ハクビシン

- ◆ 学名 *Paguma larvata*
- ◆ 分類 ネコ目 ジャコウネコ科
- ◆ 大きさ 頭胴長約60センチ 体重約4キログラム

顔の中心の鼻先から頭にかけてある白い線がハクビシンという名前の由来になっています。もともとは中国や東南アジアの島々が原産地なので、日本には毛皮として利用するために、人間の手によって持ち込まれたと考えられています。「石川県の哺乳類」(1999)によると、石川県内においては1983年に加賀市で初確認されていて、その後北上して金沢市まで生息範囲が広がっているとの記載があります。現在ではさらに生息域は拡大していて、能登地区でも観察されるようになりました。

小鳥や昆虫、果実などを食べますが、ミカンやナシ、イチジク、イチゴなどの栽培作物を食い荒らす被害も起こっています。同じように海外から移入されたアライグマがさまざまな問題を引き起こし、特定外来生物に指定されていますが、このハクビシンについては移入された時期が特定されていないため、指定の対象にはなっていません。夜行性で木や壁なども登ることができ、人家の屋根裏などに入り込んですみつくこともあるので、フン尿や臭いなどの問題も発生しています。

原産地の中国では毛皮だけでなく、食用としても利用されています。ある時期にはサーズ(SARS)という伝染病の宿主と考えられていたこともありましたが、それは誤りであったことが判明しました。

## — 似たもの同士 —



ハクビシン



タヌキ



アナグマ



アライグマ

ハクビシンはタヌキ、アナグマ、アライグマと顔の様がよく似ていますが、顔の白や黒の色の部分を見るとその違いがよくわかります。共に頭から鼻の先にかけて白いすじが入っているハクビシンとアナグマを比べると、白色の部分の大きさや形がずいぶん違います。

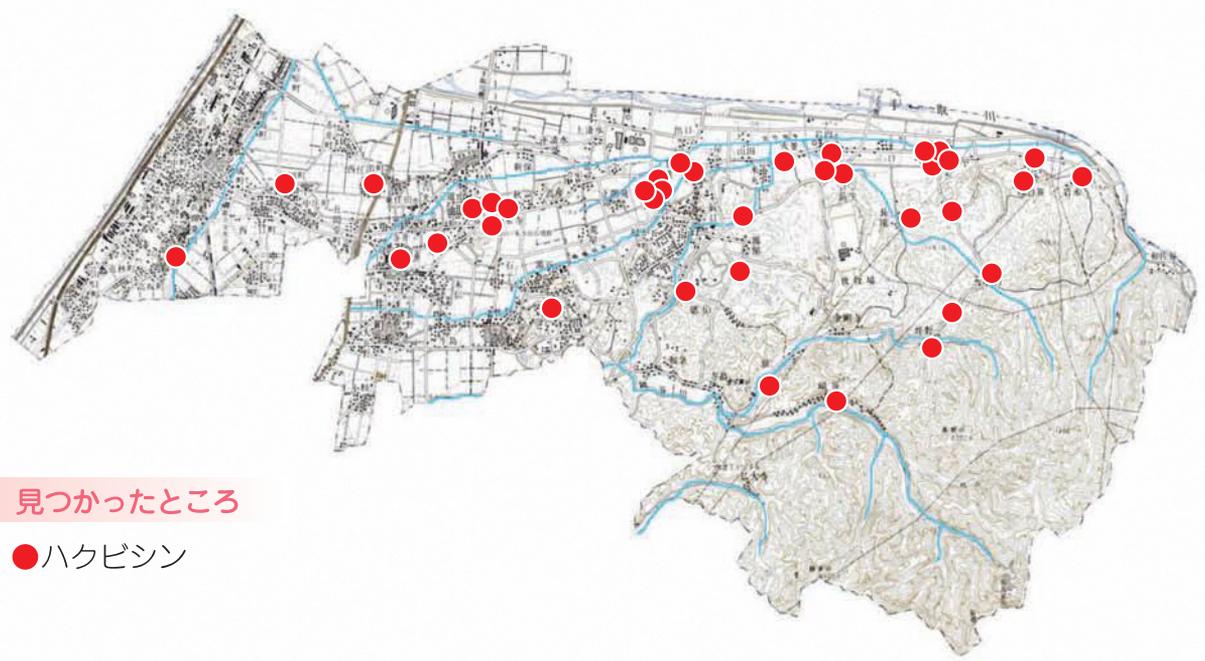
またタヌキとアライグマの眼のあたりの模様も大変よく似ていますが、アライグマの尾には白と黒のしま模様があることで区別することができます。



タヌキの尾



アライグマの尾



見つかったところ

●ハクビシン



## イノシシ

- ◆ 学名 *Sus scrofa*
- ◆ 分類 ウシ目 イノシシ科
- ◆ 大きさ 頭胴長 100～150センチ 体重 80～150キログラム

土の中のミミズや幼虫、植物の根、タケノコなどのほか、ドングリなども好んで食べます。足が短いため雪に弱く、もともと石川県内には生息していませんでしたが、昭和30年代ころから次第に生息数が増加してきています。これは暖冬の影響で積雪量が減ったことが原因で、県内で繁殖するようになり、現在では農業被害も発生しています。能美市では近年イノシシが収穫前の田んぼに入り込む被害が多発していることから、電気柵や金網フェンスによって周囲を囲む対策が進んでいます。また、住宅地に迷い込んでパニックになったイノシシは、危険なので注意が必要です。

私たちが食用としているブタは、もともとイノシシを家畜化したものです。近年では、養殖のためにイノシシとブタを交配したイノブタの飼育も行われています。ところがこのイノブタが野外に逃げ出し、ふたたび野生のイノシシと交配していることが他県で確認されています。このイノブタは本来のイノシシと比べて体が大きく多産であることから、野性化するとより深刻な農業被害が発生することも指摘されています。

## — ウリ坊 —

「のたうつ」はイノシシが「沼田場(ぬたば)」と呼ばれる泥土の中で寝転びながら、全身に泥を塗るようすをさす「ぬたうつ」から変化した言葉です。そのようすから、苦しみもがいてころげまわる場合に使われ、強調して「のたうちまわる」ということもあります。しかしイノシシにとっては、身体についたダニや虫を落としたり、体温を調節するために行うので実際には気持ちの良いことをしているわけです。

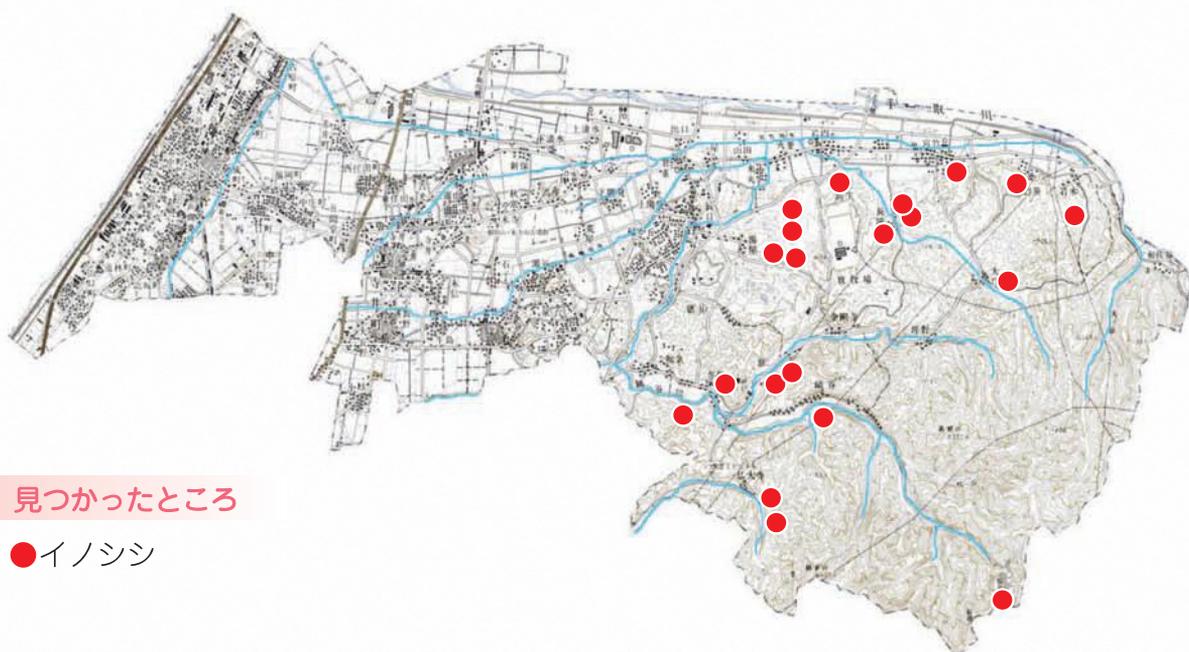
子どもの頃の体型や体の模様がシマウリに似ていることから、ウリ坊、ウリンコ、ウリッコなどとも呼ばれるようになりました。この模様は、縞模様の体毛が体に沿って縦に生えており、成体よりも薄く黄褐色をしているのが特徴です。子どもの頃のイノシシには天敵が多く、この縞模様は森の中では保護色になっています。しかしこの縞模様も、授乳期が過ぎた生後約4か月程で消えてしまいます。



ぬた場



ウリ坊(宮竹町)



見つかったところ

● イノシシ



宮竹用水

## ニホンジカ

- ◆ 学名 *Cervus nippon*
- ◆ 分類 ウシ目 シカ科
- ◆ 大きさ 頭胴長90～180センチ 体重40～120キログラム

成獣になるとオスはメスの1.5倍ほどの大きさになります。おもに草や木の葉、木の実を食べますが、食べ物が足りなくなる冬期間は樹木の皮なども食べます。そのため植林で植えられた木の苗を食べるなど、林業への被害も発生していて、イノシシと同じように個体数の増加には注意が必要です。

オスの頭には角がありますが、毎年4～6月になると根元から落ちるので、能美市内でも落ちた角が見つかることがあります。この角は、秋の交尾期になるとオスどうしがメスを奪い合う時に使われるもので、年齢が高くなると枝の数も増えてゆきます。

石川県内には大正時代ごろまでは数多く生息していましたが、その後いったん絶滅したと考えられています。しかし近年、ふたたび姿が見られるようになりましたが、そのほとんどは群れから離れたオスの成獣なので、今のところ県内で繁殖していないと考えられています。

2011年10月には、宮竹用水内に入り込んで動けなくなったオスの成獣が発見され捕獲後、山間部へと放されています。

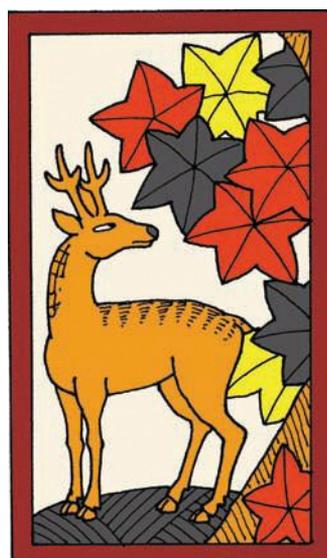
## — 鹿の角に蜂 —

シカの角にハチが刺しても、何も感ぜず、動じないことから、「効果がないこと」を意味し、同様の用例で「鹿の角に玉霰(たまあられ)」があります。角を落としたあとから生えてくる角は、袋角(ふくろづの)といって軟らく、神経も鋭敏で物にふれるのを嫌がります。その時のシカは気が弱くなり、闘うどころかメスが寄ってきても逃げ回るようです。

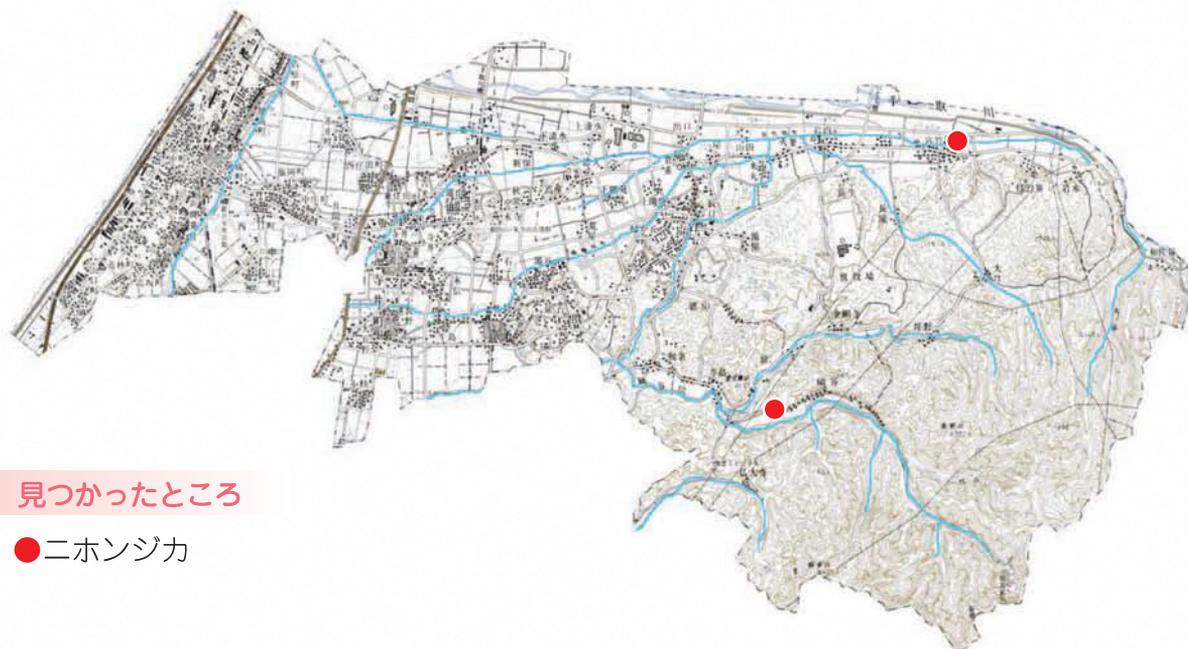
特定の人をわざと無視することを「シカト」という俗語がありますが、これは花札の10月に描かれている、もみじ葉の下で横を向いているシカの姿から生まれたそうです。シカは臆病な動物で群れて行動し、逃げる時は仲間が迷わないように尻の白い毛を広げて目立つようにして逃げるように、仲間を「シカト」するような性格ではありません。



市内で発見された二ホンジカの角



花札の図柄に描かれる二ホンジカ



見つかったところ

●二ホンジカ